

1ヶ月前に、私は東ドイツの小さな二つの街を訪ね、その現状や再生の取り組みを知る機会を得ることができた。「東のノスタルジー」という言葉は、その時に目にした街の情景とまさに重なりあうのである。

## 東の街

「ヴィッテンベルゲ (Wittenberge)」という東ドイツの街の名をこ存じだろうか。

ルターの宗教改革の本拠地で、現在大学の街としても知られる「ヴィッテンベルク (Wittenberg)」と非常によく似た紛らわしい名前であるが、しかし最後にeがつくこの街は、その有名なサクセンの都市とは全く異なる。北東ドイツのブランデンブルク州のはずれに位置する、ブリガニッツ郡の一都市であり、東ドイツのドレスデンからハンブルクへ、そして北海へと広く流れるエルベ川河畔に横たわる小さな街である。旧東ドイツ時代には産業都市として栄えたものの、おそらく日本人にはその名をほとんど知られていない。

そしてもうひとつは、ヴィッテンベルゲから北東約12キロの距離に位置する、古都としての美しさゆえにブリガニッツの「真珠」と称された、郡都「ペルレベルク (Perleberg)」である(地図1)。

ヴィッテンベルゲ市とペルレベルク市は、ドイツで最も重要な大都市である首都ベルリンと、国際貿易都市ハンブルクのほぼ中央に位置する小さな東ドイツの街で、その巨大都市の存在がゆえに、

統一後急速に経済基盤を失い、またそれがゆえに東のノスタルジーが生きながらえた場所でもあった。その朽ちかけた歴史の名残を生かしながら、街の再生や活性化を図る動きが、厳しい状況のもとで少しずつ試みられている。

## 街の再生計画

こうした東ドイツの小都市の都市計画には、統一直後には主に西ドイツの都市計画事務所が携わっていたが、約8年前からこの2都市の調査・計画に関わってきたハンブルクの都市計画家ゲラルド・ロエマー氏の案内により、市役所や現地の再開発管理会社(ドイツの人口1万人以上の都市では、民間の再開発管理会社の現地事務所が各々の計画にあたっている場合がよく見られる)への訪問、さらに都市の現状や再生への取り組みの説明を聴取する機会を得た。

彼はまたドイツのオッテンゼン地区(ハンブルクのアルトナ区)と日本の向島地区(東京都墨田区)の草の根まちづくり交流に長年関わってきた一員であり、昨年の訪問は、この交流による日本のドイツ視察の一環で、私は建築に関係する者の一人としてこれに同行させていただいたわけである。

観光客さえほとんど訪れることのない東ドイツの街へ、遙か日本からそのまちづくりを視察に訪れた我々は、ヴィッテンベルゲでは地元新聞からの取材を受けた。このことは長年都市計画の先進国として日本のみならず他の諸外国にすぐれた見本を示し続けてきたドイツにとって

さえ、再生していくことが困難な東ドイツの小都市の問題を抱えている現状を示していたように思われる。

まさに、世界のマスメディアに彩られる東西の融合と発展の陰に、ひっそりと存在し、余命わずかな多くの小さな東ドイツの街々において、「再生」の道を歩み始めたこの二つの街は、「救われた」ほんの一部の例であったのかもしれない。なぜなら、一東のノスタルジー」は今や多くの東ドイツの地域で消えてゆこうとしているからだ。

## ヴィッテンベルゲ

Wittenberge

………遺跡化する小さな歴史都市………

## 多様な歴史建物を有する街

ヴィッテンベルゲはエルベ川流域の農業地帯北部に位置し、農業都市として13世紀に誕生している。船の形をした街区がその特徴で、戦災を免れたために現在も旧市街地にその原形を留め、中世紀からの建造物を残す歴史都市だ(写真1)。

エルベ川と1846年に開通したベルリンーハンブルク間の鉄道線に沿って位置する、わずか約38㎢(うち市街地面積11㎢)にしかなかった小さなこの街は、19世紀には河川に小港を持つ産業都市として急速に発展していった(写真2)。

1989年の東西統一による産業構造の変革の波は当然のごとくこの小さな街をも呑み込み、短期間のうちに数千人もの労働者を抱える三つの大企業は倒産に追い込まれた。統一当時3万人近くあつ

